えんちょう通信

No.７０
令和　４年　５月２６日
福島市立清水幼稚園
発行者　佐藤　一男

同じ場所で、同じ時間をすごすということ

先週の５月１８日(水)は、久しぶりに快晴でした。幼稚園の子どもたちが、小学校の中庭に散歩に行きました。９時から年少組が、そして少し時間をおいて１０時頃、年長組が出かけました。

６年生が校庭で鼓笛の練習をしています。子どもたちは小学校の校歌の演奏を聞きながら、校庭をぐるっと一周して、中庭まで歩いていきました。

技能主査の遊佐さんが、中庭の入り口のカギを開けて、いつでも子どもたちが入れるように用意しておいてくださいました。

幼稚園の子どもたちに気が付いた山下教頭先生が、「いいお天気ですね。いっぱい見ていってくださいね。」「みなさんは、年少組さんですか？」と声をかけてくださいました。子どもたちは「ちゅうりっぷ組です。５歳です。」と胸を張って答えています。

廊下から松野校長先生が、笑顔で手を振ってくださっています。

「イチゴが赤くなってる！」「大きなメダカがいる！」と、子どもたちは大喜びです。静かな校舎からは、授業を進める先生の声が聞こえてきます。小学生の子どもたちは、幼稚園の子が中庭をキャッキャと駆け回っていても、きちんと授業に集中しているようです。

しばらくすると授業の終わりのチャイムが鳴り、校舎はまた小学生たちの声でにぎやかになっていきます。

少し後で出かけた年長組の子どもたちが、幼稚園に帰ってきてから「給食のにおいがしたよ。」と教えてくれました。「今日のメニューは、何だろうね？」ときくと、「ごぼう。ごぼうのにおいがしたもの・・・。」と嬉しそうに教えてくれました。

小学校とのこのような日々の何げないかかわりの中で、子どもたちは、自分の目で見たり、聞いたり、ふれたりして、「小学校」を理解し、親しみをもつようになっていきます。ですから幼稚園の子どもたちは、鼓笛隊の校歌の演奏を聴くと、「あっ！これ、知ってる！」とすぐに言います。

コロナ禍の中、小学生との交流はなかなかできませんが、小学生と同じ場所で、同じ時間を過ごすことで、子どもたちが小学校への憧れや期待を膨らませてくれればいいなと思っています。